漢王朝のやきもの 褐釉陶と緑釉陶の鍾（古代鏡展示館所蔵）

展示品は中国の後漢時代（25年～220年）のやきもので、それぞれ褐釉陶と緑釉陶の鍾（上から見た形が円形のつぼ）です。後漢時代は日本では弥生時代の終わり頃にあたりますが、中国ではすでに釉薬（うわぐすり）をかけたやきものが作られていました。

日本と中国で異なるやきものの呼び方

日本では、釉薬の有無や胎土（やきものをつくる土）の違いで土器・陶器・（炻器）・磁器に区分します。陶器と磁器を合わせて陶磁器といいます。

中国では1000℃以下の低い温度で焼いたやきものを陶とよび、それより高い温度で焼いたものは瓷（磁）とよんで区別します。

褐釉陶と緑釉陶

鉛を含んだ釉薬（鉛釉）に酸化鉄を加えて、800℃～900℃程度の低火度で焼成し褐色に発色したものが褐釉陶、酸化鉄の代わりに酸化銅を加え緑色になったものが緑釉陶です。

褐釉陶・緑釉陶は、中国では戦国時代（前403年～前221年）頃に出現したとされ、前漢時代の終わり頃（紀元前後）から本格的に作られるようになります。その後、後漢時代の終わり頃より急激に衰退していきますが、その技術は後の三彩（唐三彩）へと繋がっていきます。

今日われわれが見る鉛釉陶のほとんどは後漢時代の明器（お墓への副葬品）で、展示品も青銅製の鍾（上から見た形が円形のつぼ）を模した明器です。

（学芸課　村上賢治）

褐釉陶の鍾

緑釉陶の鍾